

強、宋時代に陳彭年らによつて増改されたため、「重訂玉篇」とも呼ばれる。原本の玉篇に「蕎」の記載があつたかどうか、散逸した今では確かめる術もない。ともあれ、二書とも梁時代の著作ゆえ、蕎麦の初見は六世紀中ごろ（わが国の古墳時代中期に当たる）までさかのぼることができた。これも偶然、崔禹について調べたのがきっかけで、自説よりさらに一世紀さかのぼれたのは、まさしく僥倖といつてよい。

〔二〕日本の続日本紀

日本における蕎麦の初見といえば、「続日本紀」卷九の元正天皇^注が養老六年（七二二）七月十九日に発せられた次の詔である。これより古い史料がまだ見つかっていないからである。

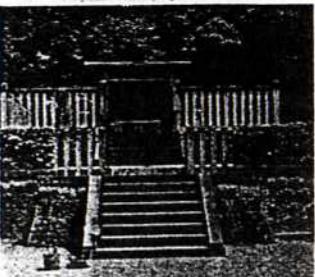
九月二日、元明天皇のあとを受け即位し、日本根子高瑞淨足姫天皇と称された。在位九年にして、

養老八年（神龜元年）二月四日皇位を聖武天皇に譲られたあと仏門に帰依し、天平二十年（七四八）四月二十一日、六十九歳で崩御された。御陵は奈良市奈良坂町にある奈保山西陵で、陵形は山形である。

……今夏無レ雨、苗稼不レ登、宜_丙令下天下国司勸ニ課百姓一、種中樹晚禾蕎麦及大小麦上、藏ニ置儲積一、以備ニ年荒甲。

これを古訓にしたがつて読むと、

ことしの夏は雨降ることなく、たなつもの（田から生ずるもの、すなわち稻。植えつけた穀物）は実らず、よろしく天の下の国司（朝廷から諸国に派遣された地方官）をして、おおみたからに勧めおおせ、おくて（遅く成熟する稻。禾を狭義の粟と解する向きもある）・そばむぎ及びふとむぎ（大麦の異称）・こ



元正天皇御陵。

前記の元正天皇の詔によつて、当時の農民がソバの栽培方法を知つていたことは、容易に推察されるはずである。では、ソバ栽培の年代はいつごろからだろうか。

日本のソバ栽培事始め

〔一〕遺跡にみられるソバ

安達巣氏は繩文晩期（前一〇〇〇～五〇〇年）伝来食として、長芋（原産地＝中国）、里芋・蒟蒻（インドシナ）、稗・シコクビエ（アフリカ）、粟（西アジア）、黍（インド）、蕎麦（中央アジア）、稻（インド）、竹・紫蘇（中国）、胡麻・瓜（アフ